

II. ゲスト研究会

朝鮮のナショナリズム

一橋大学大学院社会学研究科教授 糟谷 憲一

はじめに

社会学研究科の歴史社会の糟谷です。専攻は朝鮮の近世・近代史でして、今は主に 19 世紀の政治史を研究しています。植民地の時期についても、学生のころから勉強しておりまして、概説、通史を書くことが多かったので、近世・近代をつなげることを考えてきました。非常に大雑把な面はありますが、今日は考えていることをお話させていただきたいと思います。

ナショナリズムのとらえ方 ナショナリズムと書いてはいるのですが、実はあまりこういう用語で説明したことはないのです。少し前に、「朝鮮ナショナリズムの展開」という、通史に近い論文を『岩波講座世界歴史』（第 20 巻）に書きましたが、高津さんから、それに関わって話をしてくださいということでしたので、こういう題にしました。

普通は民族運動ですとか改革運動ですとか、そういう呼び方でこの時期の運動を評価していました、ナショナリズムといいますと、やはり漠然としています。ここでは、「韓国併合」以前、いわゆる民族主義と訳されるナショナリズムという理解に立ってですけど、この時期をその生成期、これからできてくる時期ととらえる、こういう定義で考えてみます。

朝鮮が日本と条約を結んだり、欧米諸国と条約を結んだりしたのも、進んでやったというよりは、押し付けられた面が強いわけで、それに伴って朝鮮のなかでもいろいろな外からの圧力に抵抗して、またその中で独立を確保しようと、あるいは失いかかったときには獲得しようとしたわけです。そういうことで、併合までを念頭におくと、ナショナリズムは「欧米・清・日本の勢力に抵抗し、独立を確保・獲得をめざした諸運動」というような定義になるわけです。

これは、基本的に運動、政治史の視点からこういうふうに定義したものです。この他に、ナショナリズムというか、ナショナリストの思想というものを取り上げて、こういう特徴があるという思想史的な研究方法をとる場合もあります。私はそういう方法ではなくて、全体をつなげてもっと広く理解するには政治史のほうがいいということで研究を進めていますので、こういう理解になっています。

植民地期も、基本的にはこういう「独立の確保・獲得をめざした諸運動」という定義でいいわけですが、解放後、植民地からの独立を達成した後の時期については、これでは困るわけで、「民族・国民の形成をはかる運動」であるとか「民族・国民としての統合をめざす運動」というようにしておかないといけないと思います。ただし、朝鮮の場合には、この民族・国民というものをどのように設定するのかという問題があります。半島の分断状況とか、あちこちに散らばって住んでいるということを含めると、かなりこれ自体、定義自体が微妙なところがあることは、容易に想像されることではなかろうかと思います。

研究史 次に、従来、どのような研究がされてきたのかという点に移ります。解放後のことは実はあまり勉強していないので、ここでも省いております。本当は現在いろいろと起きていることを説明するには、解放後のことをきちっと説明しなければいけないので、その点ではご期待に添えないと思いますが、研究がきちんと行われているのはやはり植民地の時期までですので、植民地期までについての研究に限定して話をします。

従来の研究ですと、民族運動の形成過程あるいは展開過程のとらえ方として、開国—というのは日本との条約の締結ですね—前後から併合まで—

1910年ですが一、三つの主な主体が展開した運動の組み合わせ、絡み合いで理解していきます。これはそれぞれレジュメに出っていますが、衛正斥邪派と開化派と東学といった、それぞれかなり性格を異にした主体ですが、その運動の絡み合いとして理解していきます。

植民地期については、おおむね運動が活発に展開するのは、三一運動—1919年—の後ですけど、従来の開化派の系譜を引いていると理解していると思うのですが民族主義者、それから新しく興ってきた社会主義者がそれぞれ運動を組織して、それが絡み合って展開していきます。どっちが正しいのか、中心なのかという議論もされたりもしますが、二系統の運動の絡み合いという理解をして説明をしていくという研究がされています。

私が研究をはじめたのは、1970年からののですが、その頃は今日とは違って、たいへん北朝鮮の影響力が研究者の間では強かったのです。北の歴史学界は一応マルクス主義的であって—いまはマルクス主義とはちょっと違うと私は思っているのですけれど—、その立場に立った歴史叙述が刊行されております。『朝鮮近代革命運動史』という本が1962年に科学院の歴史研究所というところから出て、それを在日朝鮮人科学者協会の歴史部会が64年に訳したものがありました。私たちは大学生のころにこれを回し読みして勉強をしました。影響があったというのはそういう意味でもあったということです。それと北で出ていた『歴史科学』という雑誌があって、これは60年代の半ばぐらいまで出ていたのです。60年代半ば以前の北のいろいろな研究の影響を受けたことは間違いないことです。

こうした北の研究成果に学び、さらに発展させた方が、在日朝鮮人の歴史学者で、のちに花園大学の教授となった姜在彦さんです。姜在彦さんは、70年代に入ってレジュメにある3つの本（『朝鮮近代史研究』『近代朝鮮の思想』『近代朝鮮の変革思想』）を書かれました。これらの著作は、民族運動というよりは、その思想に重きをおいて、主に併合以前あるいは三一運動ぐらいまでの民族運動

とその思想の展開過程を非常に体系的に叙述した本です。これらを勉強して、しかしやはりおかしいんじゃないかと言って批判しながら研究を進めていったというのが、その後における私の研究の展開だと思います。

先ほど申しました、3つの性格の異なる主体を絡み合わせてみる見方というのは、この姜在彦さんの枠組みが強く及んできたということです。私がかかなり昔に書いた研究史の整理（糟谷憲一「近代の政治史」朝鮮史研究会編『新朝鮮史入門』）には、70年代当時の研究状況が書いてあります。当時の一般的な問題意識はつぎのようなものです。植民地になる前の朝鮮の社会は非常に停滞してきた、外国の勢力によって単に左右される存在に過ぎなかった、前者は社会停滞論、後者は他律性史観と呼ばれているのですが、そういうものを批判して、朝鮮にも独自の発展というものがあったのだと論じます。前近代については、かなり社会経済的な発展を辿るというような傾向の研究がされるわけですが、近代については、経済的に成功したとは言い難かったのです。それで、朝鮮が置かれた社会状況の中で当面する問題を解決しようとして起こった運動が非常に合法的に、ちゃんと理屈にあって展開をしたという説明になってくるわけです。それを内在的発展論と呼びましたが、そういう議論が研究の動力になってきたのです。

内在的発展論の抱えた限界・問題点というものも、上に書いた文章（前掲「近代の政治史」）に書きましたけれども、本当に内（国内的要因）だけしか見ないというところがあって、国際的条件がどういう影響を与えたのかということ、それから確かに解放運動というところに重きが置かれますから、その側にだけ注目がいって、例えば、それを支配している側の体制の客観的な分析ですとか、そういうことも弱くなるようなことがありました。そういうことはきちっとやらなくてはいけないという研究上の批判が出されて、それなりに少しずつ克服されてきているというのが今日の朝鮮近代史研究の到達点ということが出来ます。

研究史についてはこれぐらいにして、1で朝鮮

のナショナリズムの基といいますか、そういうものが如何に形成されてきたのか、2の方で、植民地時代にそれがどのように展開したのかということをお話しします。3番目に本当は解放後にどのように変容したのかという話をしないと起承転結が出来ていないことになります。途中までになって申し訳ないところです。それでも充分いろいろなことがありますので、詳しく説明するところと、簡単に流すところと分けてお話しします。

1. 朝鮮のナショナリズムの形成

(1) 前提—朝鮮王朝(李朝)の政治体制と政治思想—

中央集権的国家 最初は前提になることですが、日本の歴史とアナロジーでとらえるとなかなか分かりにくいところがあります。特に違う点というものを、政治体制と政治思想の面について述べます。

まず政治体制です。同じ時期の日本は幕府と藩による支配体制で、いわゆる領主制ですね、地域的権力者による支配というものを基礎にして成り立っているのですが、朝鮮王朝—最近では朝鮮王朝といいます。以前はよく李朝といっておりましたが—、中央集権的な国家で、王と支配身分である両班による支配です。

両班というのは、科挙という試験を合格した官僚を中核とするものであります。ただ、この官僚というのは近代国家における官僚と共通する面もありまして、文書主義的な行政をするというようなどころでは共通しますが、一方では王の臣下としての位置にありまして、官僚制の中に主従制が組み込まれています。そういうものであって、独自の内容をもっている官僚制です。

この両班という身分がそれ以外の人々を支配するというを基本にしているわけですが、その両班の中にもいろいろと階層差があって、より権力が狭い範囲に集中していくというしくみになっていると理解しております。16世紀の末頃から科挙で合格して権力の中核に入る官僚たちの間で、

党派争い(党争)が起こります。この党争の研究が現在の私の研究になっています。最初二つの派に分かれたのですが、17世紀末近くになって4つの党派に分かれまして、名前はここにあるとおりです(老論・少論・南人・北人)。その中で、老論と少論というのがこの後有力で、争いをしたのですけれど、老論の勝利という形で決着をして、18世紀の半ば以降、この老論という党派に属している者が権力の多数派を絶えず構成するというしくみができます。

さらに19世紀になると老論の中でも王の外戚ですね、王妃を出す一族となった者に権力が集中するという、外戚政治、朝鮮では世道政治体制と言ったり、勢道政治体制と言ったりしますが、かなり特定の党派の、特定の家門に権力が偏って集中していくという体制が出てきます。

政治思想 政治思想の面では、朱子学が前の王朝の高麗である時期ですね、14世紀頃に入ってきます。もちろん、古い儒学はそれ以前に入ってもう根付いているのですが、新しい儒学である朱子学が入ってくるのがそのころです。一種の思想運動であり、社会運動なのですが、朱子学の唱えることにしたがって社会の風俗というのですか、慣わしを変えていくという運動をこの両班官僚の母体となる階層が熱心に行って、世の中を変えていきます。いわゆる政治思想、或いは社会的思想という面でも、朱子学は正統思想としての地位を16～17世紀には確立していきます。朱子学を奉じない者は異端であるとして強く排斥されるのが17世紀です。

それから、社会の仕組みを変えた点で大きいのは親族制度の面であります。父系の血統を尊重する血縁組織というのが中国の本来の親族制度であり、それが儒学によって支えられているのですが、逆にそれが規範となって、朝鮮では意識的にそういった制度につくり変えられてきました。従来は母方の血統というのも重視されていたわけですが、そういうふうになっていきました。例えば、姓が同じ者は結婚しないとか、姓が異なる者からは養子は取らないとか、養子についても世代が逆転し

ないように、実子がいなかった場合は、実子に相当する世代からだけ取ってくるといった、親族制度が出てきます。

それから冠婚喪祭、冠は元服、婚は結婚、喪は日本では葬の方を書きますけど、これは葬式だけではなくて、親が死にますと3年—正確には27ヶ月ですが—喪に服するということがありますが、「喪の礼」と言われます。それから祭ですが、これも日本では神輿を担ぐことと誤解されることが多いのですが、そうではなくて先祖を祀ることです。日本では仏教で行いますから、法要ということになります。そういうものが全部儒教式に変わっていくわけです。そのために先祖の、日本風というと位牌ですが、儒教では神位といいます。それを、立派な両班の家ですと、屋敷の中に御霊屋を造って、そこに納め、必ず定時に礼拝をするというようなことを含めてやっていきます。結婚の仕方にもいろいろな手続きがあって、そのとおりにやらなくてはいけないことになります。例えば結納など一部のものは、日本の結婚の風習にも取り入れられているのですが、この朱子の決めたとされている婚礼は次第が大変であります。そういうことをきちっとやるようになるのですね。

社会生活というのは、文字通りこの朱子学の決めた規範に従って実践するというものになったのです。日本の場合には江戸時代に朱子学が入ってくるのですが、学問として入ってきたというところが強くて、葬式のやり方を変えるというようにはならなかったのですね。葬式は基本的に仏教式でずっと推移します。朝鮮の場合も、高麗の時代には仏教式であったわけですが、それを排斥してこういう儒教式のものに変えていくという過程になっています。そういう意味では、かなり上から変えていった、或いは上からと横からといったほうがいいのでしょうか、変わってきました。もちろん、だからといって仏教やほかの信仰が人々、特に民衆の生活に影響を及ぼさなかったというわけではありません。例えば、寺は山奥に引越させられたりする形ですが、残るわけです。こういう規範で一番律したのは支配層である両班なので

して、そういうふうに変わって行きます。

それから大体そういうように社会が創り変えられていく過程で、16世紀の末に秀吉の侵略があります。基本的にはよく戦って退けたと思いますが、明の相当な大軍の支援を受けています。それで、明には国家を救ってもらったとして非常に恩義を感じる考え方が出てきました。儒教的な理念に裏づけられて、そういう思想が出てくるわけです。ところがそれからまもなく、17世紀前半に、満州の女真族が大きくなって清を建てます。朝鮮は清の侵入を受けて、それまでは明に臣下としての礼を取っていたのでありますが、付け替えさせられて、清に服属するということとなります。それだけではなくて、明が滅亡するということが起こります。半世紀足らずの間に激変があったのです。その結果、朱子学がすでに定着していたことを背景にして、この国際情勢の変動を目の当たりにして、非常に特異な国際観というものが生まれることになりました。これは近代にまで非常に大きく影響を残したと言っていると思います。

女真族の清は野蛮な夷狄であって、文化もない連中だとして卑しく見る一方、滅亡した明はそれに比して非常に文化も華やぎ、恩義も厚いというわけで、明を尊ぶこととなります（尊明排清）。それから、明は中華で女真は夷狄ですから、尊華攘夷という思想が根強く語り継がれます。それだけではなくて、明の滅亡後は中国に伝えられていた中華の文化的伝統というものが、儒教の定着した朝鮮にこそ受け継がれたのだという思想、朝鮮は小中華だという思想が強まるわけです。これは文化的には自分たちのほうが清より上であるという文化的自尊思想です。これは日本に対しても当然、自分を高しと見るのですから、適用されて、日本は文化的に見ると野蛮であると見ます。日本が野蛮と見られる根拠はずっとありまして、よく裸で歩くわけですね。そういうことは普通はやらないとされているわけで、彼らはやるから野蛮だと見るわけです。そういう理屈の枠組みで見ると、日本は確かに夷狄だと言われても仕方がない振る舞いをするのですが、そういう見方がなされます。

それから 18 世紀の後半に今度は西洋の文化・思想、当時の代表として、天主教（カトリック）がやってきますが、これは誰しも愛せというような言い方をしますので、「無君無父」である、君臣の別や父子の別を否定するような正しくない教えだと非難され、邪悪な学とされて排斥をされ、弾圧をしばしば受けることになります。それにもかかわらず、かなり広がっていくわけです。こういう「邪学」である天主教を排斥して、「正学」である朱子学を守ろうとする議論が登場してきます。これが「正学」を衛り、「邪学」を排斥するという「衛正斥邪」という言葉の起こりです。儒学の中の用語から出てくるのですが、特定の内容をもってくるようになるのはこの頃からです。

（２）衛正斥邪派の形成

大院君政権 いよいよ本論に入るわけですが、1863 年に王朝の最後から二番目の王になることになる、高宗という王が、12 歳（数え年）で即位をします。したがってまだ少年でしたから、父親の大院君が実権を握りました。高宗は傍系から王族から入ったので、先ほど申しましたような形、2 代前の王（憲宗）の養子になる形になります。父親の代の者を王につけるわけにはいかなかったもので、こうなったわけですが、都合が悪い、前例が無いことに、王の実の父親が生きていたわけです。亡くなっていればなんの問題も起きないのですけれど、実際に政治を行う能力がこの時点ではなかった少年王に代わって、父親が実権を握って、当時としてはだいたいぶまき直しの政治を行います。

前後の時期に比べて、いろいろな意味で非常に引き締めの政策みたいなようになるのです。内政では今までは、王を時にしては蔑ろにするような、実際には王との関係は悪いわけではないのですが、多数派、権力の中枢にずっといた安東金氏ですとか、或いはそれを支えた老論の勢力を抑制して、弱小の党派（南人・北人）を引き立てます。彼らを高官に登用して、大院君の腹心勢力をつくった。

両班には一部の税の免除など、いろいろな特権があったのですが、そういうものを無視して、両

班からもどんどん取り立てるようにした。その財源を基にして、景福宮については寄付金も募りますが、立派な宮殿を再建します。秀吉の時に焼け落ちたものを久しぶりに再建して、壮麗な宮殿を建てることによって王権の威力を見せようというねらいがありました。新財源は全体として王権の強化と、他方では対外的に強硬策をとりますので、そのための軍備の強化に充てました。

外交面では、すでに 1830 年代頃から朝鮮にも欧米の艦船がやってきて、開国通商を求めたのですが、大院君はこれをきつく拒み、攻めてきた艦隊を撃退します。その際の理屈というのは、西洋諸国というのは西洋の夷狄、洋夷ということで排斥することです。これは攘夷主義、つまり女真族を夷狄として排斥していたのを西洋に当てはめて拡大したわけです。そういう考え方になります。

衛正斥邪派 それを受けてですが、政権の中央にあった者だけでなく、田舎に住んでいた両班たちで、朱子学者になりますけれど、彼らはこの主張を支持します。衛正斥邪論というものをさらに展開して、単に天主教を排斥するというだけではなく、広く西洋諸国を排斥する。それから「正」も単に朱子学というだけではなく、その朱子学に支えられた体制というように広くとらえて、大変政治的色彩を強くしてきます。

ただし、大院君とは内政面をめぐっては違いました。田舎の両班というのは、両班の特権が剥奪されることについては非常に反発することになり、その点では、大院君の内政を批判しました。従って、大院君とはかなり対外政策面では意見が近いのですが、全体としてみると別の考え方をする独自の政治勢力がつくられた。これは併合前後まで有力な勢力として折に触れていろんな運動を展開することになります。これを衛正斥邪派と呼んでいます。当時そう呼んでいたわけではなく、衛正斥邪論を唱えたその人々のことを研究ではそう位置づけをして呼んでいるわけです。これとまったく逆の考え方をするのが開化派です。

（３）開化派の形成

1873年に大院君が政治的駆け引きで失脚します。一番大きな要因は、高宗が20代になってきて、いろいろなことを考えられるようになり、父親が疎ましくなったということがあるのですが、その際に、王妃の一族を含む老論の名門と結んだわけです。そして、王妃の一族が政権を掌握します。今度、外戚として勢力を振るうのは、安東金氏ではなくて、驪興閔氏になりました。これが日清戦争の頃まで続く体制になります。

この閔氏政権は、大院君が対外的に強硬な路線をとったのに対して、協調路線をとりました。日本との間も、大院君の時には対立をしていたのですが、1876年に条約の調印に応じるという形になります。この際に、呉慶錫という通訳官がいて、日本には鉄道や電信が走っていることを聞いて、それでこそ開化の国であると言ったということを、交渉に当たった日本側の外交官が記録に残しています。従って、そういうことを良しとする思想がすでに開国以前に、この呉慶錫を含めて、形成されていたということが同時代の史料でわかります。

条約の調印の後も、呉慶錫がこういう発言をしたということも影響してくると思うのですが、日本と接触をして、そういう思想をさらに深めて、政治勢力として結集していくという動きができます。だいたい1878、79年頃のことです。

この担い手になったのは金玉均・朴泳孝など名門両班の若手です。金玉均というのは先ほど出てきた安東金氏の一員で、その中の傍系の家なのですが、開化派の両班はいずれも多くの高位高官を出した家系に属しています。同時に、中人という、両班の下でいろいろな技術的な職に携わった、通訳や医者など、そういった階層の人からなっていました。これらの人の多くは、漢城（ソウル）に住んでいました。衛正斥邪派というのは田舎者なのですが、開化派というのは都会人でありまして、しかもエリート中のエリートが中核に座っているわけで、中人はエリート中のエリートとは言えませんが、非常に専門家という色彩を持っている。支配体制の中核の一部に開化派が成立し

ていくということになったわけです。こういう性格を持っていますから、当然他に対して上から臨んで改革を進めていくという姿勢をとって、新しい思想を入れて、それに基づいて改革を実行していこうということになりました。

（４）閔氏政権の開化政策への転換

1880年代以降になると、政権の中核自身が開化政策に転換し、西洋の軍備や技術・制度の導入を図る政策がとられます。大体この時期は以上のような経緯もあって、日本に学ぼうという志向が閔氏一族を含めて強かった時期です。その中で、従来からそういう方向をとってきた開化派ですね、金玉均たちの勢力が珍重されて、勢力を拡大してきます。彼ら以外にも開化派とみなされる人が広がっていくということになっていきます。おそらくこの時期が、併合前、日本と朝鮮が一番うまくいっていた時期ということができます。1880年には欧米諸国との条約が結ばれ、大体この辺りが政策転換の頂点といいと思います。

（５）壬午軍乱と甲申政変

壬午軍乱 このような転換に対しては衛正斥邪派の勢力からの反発が当然起きてくるわけです。1881年には、開国開化勢力に反対する上疏運動というものを展開します。81年には、洋式軍隊を少しつくったのですが、それで老朽化した旧式軍隊の兵士たちが、今で言うところのリストラをされるわけですね。そして給料がきちんと支給されないという事態になりました。82年にようやく一年ぐらいに支給された米の中に、倉庫番が悪さをして、糠を半分くらい混ぜて支給したということが原因となって、兵士たちが怒って反乱を起こします。その倉庫番をしていたのが、閔氏一族の家来のような地位にある者であったので、当然のことながら怒りの矛先はそちらのほうに向かっていきます。

その結果、閔氏の政権が倒れて、大院君が再び政権を握ることになりました。この情勢を危険と見た日清双方が兵を出してくるという状況になり、清軍によって大院君が拘束され、閔氏政

権が復活しました。

壬午軍乱鎮圧の結果 ここまでは基本的に朝鮮内部の事情で政権の変動が起きてきたわけですが、これ以後、外部の勢力が介入して左右するという局面がはじまったわけです。そういう意味では大変重大な事件であったわけです。ただ、結果としてはなお開化政策が推進されるという方向に進んでいきまして、強力な鎖国攘夷派である大院君もいなくなりますし、衛正斥邪派も弾圧を相当に受けるわけですので、開国開化は国是であるということを王が公然と言えるようになりました。ただし、清軍が 3000 名ほど駐屯を継続して、それを背景にして清が内政への関与を強めます。閔氏政権は従来の清と日本を両方にらんでやっていたところから、清よりになっていきます。

開化派の急進派と穏健派とへの分裂 ただ、清もある程度の改革は必要だと考えているので、開化政策は続いていくのですが、開化派の中で清と結ぶことを良しとしない一派とこの路線でいいという派との分裂が起きたのですね。

金玉均らが反発派で、研究上では急進派と呼んでいます。そして金弘集らが協調派で、研究上では穏健派と呼んでいます。そういうことで、開化派の力というのは政治的にはうまく機能できないような状況になったと思うのです。

急進派が 1884 年に暴発して起こした政変が甲申政変であります。清軍の出動によって失敗します。このときに急進派が掲げた方針というのは、ひとつには清と対立する、清からの独立ということで、朝貢虚礼の廃止というのがあります。つまり、清に臣下として仕えるというのは廃止せよというもので、名実ともに独立というものを達成しようというものです。そのほかにいろいろな内政改革の政策がありまして、税制の改革、財政の改革、巡査や近衛隊の設置ということであり、警察や軍事、それから政体の体制を変える、少数の政府に権力を集中するという構想を出しております。実際には実行されませんですから、構想倒れになります。

この急進派の改革構想に出てくる、例えば、地

租法の改正とか、巡査とか近衛隊という用語というのは、日本の当時の制度に関連した用語であります。そこだけで判断してはあまりよくないのですが、金玉均らが日本をモデルにした改革をしようとしていたということは、構想自体によく表れていると言えます。

彼らは中央のエリートを中心としておりまして、動員したものも入れてたかだか 500 名ぐらいの勢力しかおらず、基盤は脆弱でした。従って実際のクーデタの遂行に当たっては日本の軍事力に依存するということになり、そういう意味でも非常に日本よりということになりました。

(6) 甲申政変後の閔氏政権

甲申政変後の閔氏政権というのは、あまりぱっとしないとされているのですが、急進派を抑えたことによって、清が引き続き一甲申政変の帰結です。ね、勢力を張るようになりました。袁世凱という、孫文の後に中華民国の大総統になる人物が当時はまだ 20 代で、李鴻章の部下として朝鮮にやってきて、監督官のような地位に立つというようなことが起きた時期です。

これに対して閔氏政権は清の勢力を抑えるために、例えば、ロシアと接近して牽制を図ったり、すでに欧米諸国と条約を結んでいましたから、条約に従って公使を派遣してそれでそちらと結んで牽制を図ったりします。公使の派遣に関して清はいろいろ妨害をするわけですが、それをはねのけてアメリカには公使を派遣します。

90 年には 3 代前の亡くなった後に王にされた人（翼宗）の後（神貞王后）が亡くなります。従来の例に従えば、清が宗主国としてお弔いの勅使（弔勅使）を派遣してくるということになります。ところがすでに他の国と条約を結んでおり、外交団がいる中で、王が勅使を迎える儀式をしなければいけないというのは、独立という体裁からみると具合が悪いと考えます。形式的にそれをおけばよいと見れば問題にはならないのですが、そう考えたのでなんとか派遣をやめてくれとって抵抗した一幕もあります。要するに宗属関係と

いうのは、その儀礼だけやっていたらいいという面もありますけれど、君臣関係というのは目上と目下の関係なのですね。条約関係というのは実際には力によって左右されますが、一応対等ということになっています。その両者が同じ場にあって対立しあうというようなことがあります。王や王妃や閔氏一族の相当部分が新しい条約関係を使って、清を牽制しようとしたわけです。これはそれなりに、それこそ上層に限られてはいるわけですが、やはり従来どおりにはいなくなっていて、清に抵抗して自立性を強くしておこうという志向を示したものとして理解しておかなければならないと思います。そういうことが積み重なって物事が動いていったというところがあります。

（７）教祖伸冤運動と甲午農民戦争

1890年代に入る頃になりますと、東学という新興宗教の教団の勢力が拡大してきます。東学の教祖は大院君政権の時期に、異端の教えを説いたということで死刑になっておりました。90年代になって、東学は教祖の罪名を取り消す運動（教祖伸冤運動）を展開します。

93年になると、大きな集会を開いて氣勢を上げるということになります。中央から官吏が行って、やめろと言って解散させるのですが、少なくともかなりの期間にわたって集会が開かれたということ自身は、非常に状況が変わってきたことを示すのであります。しかもそこで「斥倭洋」というスローガンが掲げられます。倭というのは日本で、洋というのは西欧で、それを斥けるということですから、外国、外からの勢力に抵抗するというものを、農民を多く抱えた集団が掲げるということは、外部の勢力に対する抵抗運動に多くの大衆を動員していくという動きが始まる合図になっていきます。

翌年、元々は地方官がいろいろ税を余計にかけたことに対する反抗から起きた民衆の反乱でしたが、それが発火点になって、悪政を行う、重たい税の負担をかけてくるような体制に抗議する蜂起が起きます。これは戦後、甲午農民戦争と呼ばれるようになった運動でありまして、東学の幹部が

指導して、まずは全羅道の農民たちが武器を取って立ち上がるようなことになったのです。そこでも「倭夷」の駆逐、これは日本の駆逐と、「権貴」、これは閔氏政権ですが、これを倒すというスローガンが掲げられます。日本や清が相次いでこの反乱にもかこつけて兵を出してきますと、政府側と和約を結んで、全羅道の中心地から撤退して、全羅道一帯に彼らが自治機関を設けて改革を行うことになりました。例えば、奴婢という下層の賤民身分の解放ですとか、実際に腐敗して悪いことをした地方官とか、それと結んだ地方の官衙の下役人を郷吏といいます。そういうものとか、やはり田舎に住んで乱暴を働いていた両班を処罰するといった、これはかなり自力救済みたいなことになりますけれども、やっていきますので、当時の支配体制の基礎にある両班の支配そのものを揺るがすといった重大な状態になっていきます。94年の10月になって、この秋の収穫が終わった後ですけれども、日本の勢力が日清戦争を通じて伸びてきたのに対して抗議をするという蜂起がありました。反日・反開化派政権、日本と結んでいた開化派の政権に対立するといった性格があります。これを日本軍・政府軍・在地両班・郷吏の組織した部隊が鎮圧するということになりますから、上からの改革派が外部の勢力と結んで、下からの改革派を押し潰したということになります。これも以後、併合に至るまでの運動の展開を大きく決定づけた事件ということになります。

（８）甲午改革

農民側を弾圧した政権側もこれに対応する形で内政改革を実施しております。1894年7月に日本が王宮を占領して朝鮮の軍隊を武装解除して、閔氏政権を倒し、代わって穏健開化派の金弘集を中心とした政権を据えます。内政上の性格から言えば、開化派政権ですが、対外的な関係からいうと親日派の政権ということになってしまいます。それによって改革が行われます。

行政機構を古いものから変えて日本式の内閣や省庁の制度に倣う。税制の整理をして金納化する。

財政官庁もたくさんあったのを一本化する。農民軍がやったのと同じことですが、身分制を廃止する。奴婢は法制的には無くしますし、両班とその他の間の差別というのも法制上無くすという措置がとられます。日本が清と戦っているということが背景にありますが、宗属関係を廃止して清から独立するという自主独立政策が行われます。実際には例えば王である高宗が清の皇帝や日本の天皇と同格の尊称、陛下と称することになるとか、独自の年号を立てるといったことに表れます。これも上からの改革であって、農民戦争に示される下からの改革に対応したということ、日本による外からの圧力ということ、これら三者が相まって行われたわけです。開化派の社会基盤というのは少しは広がっていますが、そうは強くありません。実際に行われたことは急速に行われて、多くの点で制度を変えてきました。大体、以後このことを起点にしてものごとが展開していくということでは非常に大きな転換であったことはまちがいないのです。

（９）初期義兵

甲午改革の中でですが、一時三国干渉があって、王後の閔氏はロシアと接近して日本の勢力を牽制するという政策の有力な中心となります。1895年10月、当時の日本の公使は三浦吾楼という軍人上がりの人ですが、王后を除けばそういうことは阻止できるということで、本当に殺害してしまいます。同年12月には、金弘集政権がちょんまげをきれという断髪令を出します。

96年になると、この二つのことに反対をするということを掲げて、衛正斥邪派の在地両班が、地方の武力、警備部隊のような存在や、農民たちを引き連れて、武器をとって日本や開化派の政権と戦うという運動が展開します（初期義兵）。これにはもろに小中華思想が表れていまして、甲午改革は堂々たる小中華を夷狄に落としたという言い方をして、反発を示しています。義兵が広がる中、高宗はロシア公使館に避難します（露館播遷）。これは義兵鎮圧のために中央の政府軍がほとんどい

なくなった隙を突いて、こういう政変が起きたのです。それで日本は日清戦争中に大きくした勢力を一気に後退させることになるわけです。

（10）独立協会

開化派が96年2月における甲午改革の挫折後、間もなく別な形で再起を図ったのが独立協会という結社による運動です。それに先立って新聞も発行し、これに基づいて啓蒙活動も行っております。98年になりますと、露館播遷後、ロシアの勢力がすこしずつ伸びてきたのに対して、今度はそれを抑えようという運動を独立協会が行います。大衆集会を街頭で開いたことは、非常に新しい事態でありまして、それを背景にして政府に迫って、実際に要求を貫かせることができます。

独立協会はさらに98年の秋以降、国政を改革するという運動を行いました。中樞院という政府の諮問機関があったのですが、それを立法機関にすること、その際、その半数を独立協会から選出することなどの改革案が決められました。また、独立協会や市民たちの集会と、政府が協議をして改革案を決めています。要は政府や中樞院の権限を強化して、皇帝の権限の制限を図るという改革の構想を示したものです。実際にはこの改革に反対する勢力が巻き返しまして、結局軍隊を出して弾圧、解散させるという結果になります。

独立協会の運動は、開化派系の改革運動としてはひとつの頂点になった運動であって、そういう意味での意義があると思います。また、首都の真ん中で集会を開いてそれを背景にして要求を突きつけていくという、そういう形での大衆的民衆運動、新しい運動の形態をつくり出したという意義もあります。

ただ改革構想それ自体を見てみますと、非常に限界は否めません。独立協会の会員のみが国政に参加をするという構想であって、全国から国民の代表として選出された議会を設立する構想ではありません。

では何故そうなるかといいますと、開化派の金玉均以来の性格が残っておりまして、漢城中心の

活動で、地方にも支部をつくるのですけれども、非常に限られています。支部をつくるのもほとんどが末期のことですので、漢城中心の活動であったというようなことになるのであります。そういう意味で運動の弱さをもっていた、全国的になるという点ではなかなか弱さを克服できなかったところがあります。

(11) 皇帝・宮中勢力による独立維持政策

農民たちのまとまった動きというのは農民戦争鎮圧で抑えられ、衛正斥邪派の義兵は一旦燃え尽きた形になり、開化派系の運動である独立協会も抑えられました。これで政権の中心の部分にある勢力は、自分自身だけで独立維持するということを図らなければならなくなりました。それが 19 世紀の末から日露戦争にかけての局面で、皇帝に権力を集中し、専制政治の体制であるということを宣言して、皇室財政を拡張して、そこを財源にして改革をしていくということが図られます。しかし、この時点になると国際的な環境というのは非常に厳しくなって、皇室の財政だけではやっていけないので外国から借款を得てということを考えるのですが、いろいろな列国の対立で金も借りにくくなってくるといことになり、一番狭い勢力による上からの改革というようなこともうまくいかなってきます。そういうなかで、日露戦争を迎えることになります。

(12) 日露戦争下の抗日運動についてはここに書いてあるとおりですので省きます（日本の軍用鉄道・電信線を破壊する活動／日本軍による土地収用や人夫の強制募集に反対する運動）。

(13) 反日義兵運動

日露戦争が終わる頃から、再び義兵による抵抗運動というのが起きてきます。これは長く頑強に続きまして、日本も多くの兵力を投入して、これらを鎮圧しなければならない事態に陥ります。衛正斥邪派系運動の最後の輝きといったような運動になります。1907 年に軍隊が解散されて、そこ

に加わっていた軍人が義兵に参加いたしますので、必ずしも衛正斥邪派系でない者も参加する運動になって、少し性格が変わったと理解されています。

(14) 愛国啓蒙運動

同じ時期に、開化派系の運動として展開されたのが愛国啓蒙運動です。これは植民地期の運動との関係からいいますと、大体その母体となった運動です。教育・実業、言論・出版などの活動を通じて、国の富強と国権、独立の回復を目指した運動です。これは都市部、漢城だけでなくったのはいいのですが、基本的に都市部の運動です。愛国啓蒙団体という結社をつくって、そこでの組織活動ですとか、講演会や演説会、機関紙の発行などを通じて啓蒙を図るというような活動であって、義兵が武力に訴えるというのとは対象的な運動をしたわけです。すぐには独立を回復することはできない、それを可能とする実力を教育や実業の振興を通じてつくりだそうという準備論ですとか実力養成論といわれている考え方です。植民地の時期もこういう考え方で運動が組織されていくわけですね。実際に困難ななかで粘り強くやっていくことになる、しかも権力と正面きって物理的に対決するのを避けるとなると、こういう理論になると思うのですけれども、そういう主張がつくりだされていくわけです。

2. 朝鮮ナショナリズムの展開

(1) 武断政治期の民族運動

植民地期に入ります。1910 年代は武断政治期と呼ばれています。総督は陸海軍の大将に限られ、憲兵警察、憲兵を中心とする警察機構がつくられて、人民を細かく監視する体制がつくられるわけです。言論や集会・結社は厳しい制限を受けて、例えば朝鮮人が朝鮮語の新聞を発行するということは認められませんし、集会も非常に厳しく制限されますし、宗教団体とか学術上の結社以外に認められない状況でありました。したがって、目だった大きな運動は展開できませんで、秘密結社の

活動ですとか、教育面で私立学校をつくって、そこで民族的な思想を子供たちに教えるという運動、または国外の運動ということになってきます。

（２）三・一運動

1919年、三・一運動が起きて、全国的で大衆的な独立示威運動になっていきます。従来の統治形態ではもう無理だということになりまして、変更を余儀なくされます。主な変更点は、憲兵警察制度の普通警察制度への転換、言論・集会・結社の取締りの緩和などです。

また、三・一運動のなかで、労働者がストライキをするとか、農民が多数参加するということで、彼らが、独自の勢力として登場するということになります。新しい時代にふさわしい運動の形態も登場してきます。労働者のストライキもそうですし、ビラを撒いて集会、示威運動への参加を訴えるなど、新しいものがつくり出されます。

（３）1920年代の民族運動

三・一運動を受けて、言論・集会・結社の取締りが緩和されたので、集会の開催もこれまでに比べれば容易になりますし、団体もつくれるようになります。

まず展開したのは実力養成運動です。物産奨励運動というのは、インドの国民会議派が展開したような国産奨励運動で、朝鮮人は朝鮮人でつくったものを使おうというような運動です。この他にお金を集めて自分たちで大学をつくろうという運動—お金が集まらなかったのでもうまいかなかったのですけれども—があったり、青年会が各地につくられて、愛国啓蒙団体によく似たような活動をして啓蒙活動をするといったことがもっと細かくやられるようになります。

労働運動・農民運動も初期は、非常に協調主義的な実力養成路線に立ったスローガンを掲げていまして、そういう主張をもっている民族主義者の指導下であって展開されていきます。

（４）社会主義運動の登場

ところが、これと対立する勢力がすぐに登場してきます。これが社会主義運動です。ロシア革命の影響というのが、陸続きですから、強く及んできまして、二つの共産党と名乗る組織が国外につくられます。国内では日本と同じく、共産主義の政党を直ちにつくることができるような状況ではありませんので、社会主義思想の研究宣伝を目的とする思想団体といわれる結社がつくられます。これも国外と同じように、いくつかの系統に分かれてつくられていて、これは社会主義者悩みの種になります。主なところは3派ありますけれども、そういうものが出てきますと、彼らが労働運動や農民運動の主導権を握るようになってきます。朝鮮労農総同盟という全国組織がつけられたのがその印だといわれております。

思想団体の火曜派が中心となって、1925年に国内で朝鮮共産党が結成されますが、これはできたばかりの治安維持法といったもので直ちにやられます。その後も繰り返し弾圧を受けて、28年にはコミンテルンから解散され、非常に短命に終わるのですが、かなり活発に活動を展開します。

（５）新幹会の運動

こうして民族主義者と並んで、社会主義者が勃興してくるわけです。そうした状況の下で、1924年1月に『東亜日報』、これは言論の取締りの緩和まで朝鮮人による朝鮮語新聞の一つですが、そこに李光洙という民族主義者が「民族的経綸」という論説を発表しました。

李光洙は朝鮮における近代文学の創始者として有名であるのですが、評論家でもありました。「民族的経綸」の主張は、要するに実力養成論を突き詰めていくと出てくる議論だと思うのですが、朝鮮民族は遅れている。改造しなければいけない。そのためにいろいろ努力しなくてはならないと論ずるわけです。そして、日本が許容する範囲内の政治結社を結成してそれで少しづつよくしていけばよいという議論をするわけですが、この日本が許容する範囲内というのが非常に他の人から怒りをかって、そういう妥協的なのはけしからんと

いうのと、まあそれでもいいのではないかというふうにならざるを得ない契機となっていく。

そうすると民族主義者の中の分布が変わっていくわけですから、社会主義者のなかでも非妥協派とは一緒にやれるという、そういう議論になって、共同戦線論というのが出てきます。当時中国では国共合作が展開している時期でありますし、コミンテルン自身も共同戦線論を展開している時期であったことが影響しているのですが、そういう動きが進みまして、1927年に新幹会という共同戦線の組織がつくられました。初代の会長には、李商在という人が着きますけれど、この人は1898年のときに独立協会の副会長でした。30年後にこういう地位にのぼったわけで、そういう意味では開化派系の運動の到達点という延長線上にあるといってもいいわけです。

新幹会はかなり多くの支会を国内や日本や満州に設けて40000名の会員を組織しました。植民地期の時期の運動としては、新幹会の運動というのはもっとも成功した運動に属するといってもいいと思います。

ところが総督府は非常にいじわるをして、創立大会以外の大会の開催を禁止するわけですね。支部から代表を選んで開くのが大会ですから、そうじゃなければいいだろうということで、1929年6月には近隣の支部がいくつか集まって代表する、これは複代表といって、規約にない会合を開いて、そこで役員を選びます。このとき左派よりの執行部ができるのですが、光州学生運動が29年末におきまして、それを支援する集会をソウルで開こうとしたために、抑えられてしまいます。その後の執行部が妥協的になったので、社会主義者が反発して解消してしまえという議論が出てきて、32年に解消が決議されるのです。

新幹会は民族運動・社会運動を盛り上げる上で非常に大きな役割を果たすことになりました。

(6) 1930年代の民族運動

1930年代になると民族主義者と社会主義者と

は分裂しました。また、満州では日本が戦争を始めるといった状況になってきますから、局面がかなり違ってきます。社会主義者と民族主義者が別々に大体系を異にして運動を展開していくということになっていくわけです。社会主義者は赤色労働組合、赤色農民組合など、先鋭な運動を行っていきいますが、かなりの勢力をもっています。

民族主義者も大衆運動から手を引くということではなくて、農民運動などでは独自の努力をしております。天道教系の朝鮮農民社という組織の活動ですとか、識字運動というハングルを普及するという運動が行われているのです。

日本は普通学校という小学校程度の学校をつくれますが、これは主として日本語を教えるわけです。朝鮮語も教えますけれど、就学率はそう高くないわけで、実際には日本語もハングルも読めないという人が農村には多数いるわけです。それらの人々を対象にして新聞社がお金を出して、例えば、留学で日本にっている学生であるとか、朝鮮の専門学校にいて夏休みになった学生たちが農村にいて文字を教えるという運動をします。これは社会主義者から言えば生ぬるい運動だということになるのですが、しかし、考えてみれば、こういうことを通じて、民族的な意識というのは着実にというか、掘り起こされるという動きであって、そういう意味で無視できない運動です。その危険性を感じたからだと思いますが、34年には両方とも総督府によって禁止されてしまいます。

(7) 1920～30年代における在満朝鮮人の独立運動

1920年代からそうなのですが、特に30年代になると、満州における運動の比重が非常に大きくなります。20年代には独立軍という武装団体の活動があって、これは民族主義者が主導を握っております。それに対して日本側は神経を尖らせています。満州側と鎮圧の協定を結んだりもしております。

1931年に日本が満州で戦争を起こしますと、中国人と朝鮮人が、共同して、これに反対する武装

闘争を起こすようになっていきますが、その中に朝鮮人の民族主義者主導下の独立軍、社会主義者主導下の赤色遊撃隊も参加しております。その中には、今日の北朝鮮政権の源流になる、金日成の部隊が含まれていたのです。

（８）大韓民国臨時政府の成立とその活動

大韓民国臨時政府というのが 1919 年に上海でつくられます。当初は非常に有力だったのですが、内部で争いが起きて、20 年代半ばには弱体化して、臨時政府とは名乗っていますが、一つの運動団体のようになっていきます。

（９）戦時下の弾圧と抵抗

1936 年に南次郎陸軍大將が第 7 代総督となってから、非常に暗い時代になります。スポーツ科学の研究会ですから特に書いたというわけではないのですが、南総督がすぐにやったことというのは、『東亜日報』日章旗抹消事件の処理です。先ごろ亡くなりましたマラソンの孫基禎選手であります。ベルリンオリンピックで優勝します。その時胸についていた日章旗を『東亜日報』では抹消して掲載したという事件が起きます。日章旗はそのまま載せたくないから、そういうことになったわけです。南総督は無期停刊命令を出して、かなり長い間停刊にしまして、『東亜日報』も非常に打撃を受けるという事件が起きました。これは民族的なものに対して抑圧を強めるという前触れであったわけであります。

翌年の 37 年には修養同友会事件というのがありまして、安昌浩・李光洙は妥協派民族主義者とされている人たちですが、彼らも治安維持法違反で検挙されます。それを通じて転向を迫られて、李光洙は戦時中には親日派のチャンピオン、創氏改名などにも積極的に応じるという立場をとっていくことになります。それで解放後には彼は否定的に評価されることになっていくわけですが、ここまではこのようにやられる対象であったわけでした、その点を踏まえてよくみていかなければならない点があると思います。

40 年には朝鮮人が発行する朝鮮語新聞そのものを出させなくするというようになっていくわけです。

おわりに

民族運動の諸段階を把握する必要 以上、かなりプロセスを述べることを中心にしてきましたが、「まとめ」として、いくつかの点を申し上げます。一つは、民族運動を諸段階に分けて把握する必要があるということです。ナショナリズムといっても、なにをもとにして言われているかということを見ると、必ずしもこういうふう経過をたどってイメージをされているわけではないのです。今日、例えばいろいろなことがいわれている時に、なにを構成要素、素材にして述べられているかということを考えてみると、ここで述べたようなことをもとにして、なぜそれが選ばれているのかということを考えていく必要があると思うのです。いずれにしても、最初から一貫してこういう固まったものがあってということではなくて、担い手も変わっていきますし、あるいは広がったりしますし、言っていることの内容もすこしずつ変わって行きますし、そういうことを見ていく必要があるということです。

実力養成論、民族主義者の評価 それと概して最初、北朝鮮系の学問の影響が強かったということにもよるわけですし、実際に運動との関係を配慮したということもあると思いますが、実力養成論とか民族主義者というのはあまり高く評価されてきませんでした。その果たした役割というのは、それなりに客観的に評価していかないと、とらえられないということがあるのではないかと、というのが二つ目です。

文学・言語・文化運動の側面 今日ここでは話はしていないのですけれども、李光洙などを今日話した側面だけで見ちゃうのは大変気の毒なことであって、彼の本分は文学者でありますから、文学を通じての主張というものがあわけです。それから朝鮮語というものが整備されるのが植民地の時期なのですね。それは総督府の政策と絡ん

で展開していくわけですが、そのことも丁寧に見ていく必要があると思います。また 20 年代以降には文化運動が大変活発になっていきます。日本を通じて、或いはヨーロッパから新しいものを取り入れたりして、そういう中で近代的な朝鮮の文化というものが創られていく過程というものがあって、それがやはり朝鮮のナショナリズムの特徴をつくっている面もあると思うので、その辺もきちんと議論しなければならないと思います。

朝鮮人にとっての「民族」「国民」の意味 それから四つ目は、ナショナリズムというのは民族や国民形成の運動だといったのですが、その場合の「民族」や「国民」というのは、いったいどこを示しているのかという問題があります。特に植民地の時期以降、非常に移動しているわけですね。日本に渡る人も多いし、満州に渡る人も多い。そういう人々を含めて、朝鮮人であるということ、連帯の意識、上から見ると統合の意識になるわけですが、そういうことが出てくるわけですが、その範囲をどのように見ていたのかということ自身を考えないといけないことです。解放後になって、二つの体制や国家に分かれていくわけですが、そういうときの場合の「民族」や「国民」というのはどういうふうに理解されるのかということ、同じく日本や満州やロシアにも朝鮮人は居るわけで、それとの結びつきでどのような意識をしていたのかということも付随して考えていかなければならないわけです。

解放後、現在への展望 解放後、現在への展望というのは、以上のことを交えてあることですが、ここまでのことだけでは現在のことはよくわからないと思います。現在のことを考える要素としてはアメリカやロシア、ソ連の存在ですとか、戦後、解放後の韓国や北朝鮮の体制の問題とか、そういうことを含めて議論しなければならないのですが、それはちょっと無理で省きました。ただなにがしか、ここまでの時期のいろいろな要素というものが、後の時代を考える際の素材として使われておりますから、そういう意味ではまったく役に立たないものではなかろうかと思います

ので、多少の意味はあったのではないかと思います。以上で終わります。どうもありがとうございました。

【質疑から】

内海：日本のナショナリズムというと、考え方がいくつかあると思うのです。一つの極には万世一系の天皇制がありますが、韓国の場合には、ナショナリズムの主要な論点というのはどういったものがあるのでしょうか。

糟谷：非常に文化的な伝統があるとか、他より優れているとか、特に日本よりは優れているという意識は強いのではないかと思います。

高津：内容はどうですか。

糟谷：例えば、儒学をきちっと身につけているとか。文化的に日本の風俗というと、儒教のいう礼儀の基準からいうと少し外れているわけです。そう言われれば、そのとおりという点もある。

藤田：日本の場合で使われているナショナリズムというのは国民統合とか、そういう継続支配との関係の中で議論されているのですが、今日の報告の中では、むしろ民族運動とか、植民地、外国支配に対して、どのような抵抗をしていくのかというところで、ナショナリズムが出てくるところです。そうすると歴史の中での朝鮮におけるナショナリズムの形成というものがもっている特徴というものが、つながりが見えないような気がしたのですが、国民統合みたいなある種のナショナリズムが利用されたというとらえ方はされておられないのですか。

糟谷：日本のような言い方はできないのですね。万世一系という具合に。どうみてもいつから始まったかはわかりますから。

藤田：だから違った意味合いをナショナリズムという意味合いの中にもたせているのですか。

糟谷：というより、文化的な意味合いが強いのではないですか。儒教とか、儒教に根ざした文化というものをきちんと備えているという自負は強い

のだと思いますけど。今でも持っている人はいるのではないですか。

藤田：そういうナショナリズムというのは、どちらかというと、植民地というか、外国支配への抵抗のあるエネルギーとか運動のある支柱という意味でのナショナリズムですか。

糟谷：やはり自尊心を保たせるわけだから、そういうふうになるのではないですか。

早川：18世紀の後半に天主教が伝来して布教活動を進めていく。しかし、儒教の観点からは弾圧していく。今日、これは併存している。文化や生活を支えていく上でも大変重要な装置として、意識を植え付けているように思うのですが、弾圧した後でも、日本の隠れキリシタンのようなことが、ずっとその間ちゃんとあったのですか。

糟谷：1780年代に入ってきて、何回も弾圧されますが、続きます。条約を結ぶと、信教の自由を認めさせられるので、それ以降はプロテスタントも含めて、布教活動が進んでいくわけです。実際に対立する局面というのは、衛正斥邪派が教会を敵にしたりということはあるのですが、だいたいそういうことが弱くなっていきます。

早川：そうすると改革派の流れが主流になっていくのですか。

糟谷：そちらのほう主流になっていくわけですね。

藤田：韓国には現在キリスト教徒が日本より多いというのですが、それとの関連では連続しているのか、ある時期からなのか。日本はキリスト教が入ってくるのが早かったが、あまり広がらなかった。ところが韓国は18世紀ですからかなり広がっていったととらえられるのですか。

早川：むしろ儒教と相容れるような形で共存しているというあたりのところが、特異だなと思うのですが。

糟谷：いまは儒教の方で直接邪学だなんていったりしないのではないのですか。キリスト教徒が多くなり始めるのは植民地期になってからだと思いますけど、また韓国になってからさらに増えると思います。19世紀や20世紀のはじめの時点で大

変多いというわけではありません。ただ、地域的にたくさんいたところがありました。西北、平安道とか黄海道の地域とか、そういうところは結構愛国啓蒙運動の勢力が強いのですね。

早川：それでは第二次世界大戦が終わった後、アメリカが進駐して、広まっていくということがありますか。

糟谷：そういうようなことでかなりキリスト教徒が増えていきます。また、北から南に入ってきた人も無視できないじゃないですかね。平安道、平壤は、植民地の時には一番商工業者が多くて、資本家の勢力が一番強いところだったのですね。1920年代に日本が地方諮問機関で府協議会という議会ほどには権利がない諮問機関なのですが、その議員の選挙をするときに、地方税の納税資格を5円以上にすると定めるのですね。なぜ5円以上にするのかというと、市に該当するものが12あるのですが、その全部で日本人が過半数になるようにということで、するのです。ところが、どうしても平壤だけは負けてしまうのですね。それぐらい平壤の朝鮮人資産家は強いのです。それを背景にしてキリストの勢力もかなりあります。曹晩植というキリスト教徒の社会運動家が平壤にいますが、この人は北朝鮮ができるときに、民主党をつくって、共産党と合作する形で政権に関与するのだけれど、金日成に粛清されてしまいます。そういう過程で、キリスト教の勢力が逃れて、南に入ってきているのですね。そういう意味では平壤というのは植民地の時代と現在とでは様変わりしていると言えますね。

早川：確かに、聞いている意識の中にも、平壤という意識はなくて、南のことしか頭になかったですね。

糟谷：西北、今の北朝鮮の西側は結構キリスト教が強かったのです。

鬼丸：小中華思想というものが、民衆のレベルでもあったのですか。朝鮮の農民というか、民衆が持っていた思想なのですか。それと関連して東学という宗教がもっている思想の背景が自覚的なものであったのか、あるいはもっと熱狂的なものだ

ったのですか。

糟谷：いつの時期かということでも難しいと思うのですが、19世紀の後半になって、日本と接触していれば、日本は変だというような意識はもっていたと思うのですが。先ほど出たのは、開国後、日本の漁師が沿岸に小屋がけをしていわしなどの魚をとりに行くときに、ふんどし一つで行くわけですよ。ほとんど裸同然で歩いている。すると村の長老や、両班の奥さんが、そういう格好で歩くではありませんといって、お説教をしているというのが史料に残っています。もちろん、村の中では上層の人の意識だから、民衆一般の対応ではないのですけれど、野蛮だとみる意識はかなり広くあったのではなかったか。実際に、行っている日本人がそうだなと思う行動をとっている。そういうことはあると思うのですね。でもそういうことは、明治になってから、お互いよく接触するようになってからだと思います。

鬼丸：日本の像を描くときに、具体的になにがあるのか。漁民たちとの接触が大きいですか。

糟谷：漁民もあるし、商人もある。それぞれ自分の経験からイメージをつくっていくのだと思うのです。

鬼丸：清が勃興して、滅亡した明の思想が、朝鮮に入ってきて、それで小中華思想というのが民衆のレベルで出てくるのですか。

糟谷：それは教えるわけですよ。清と戦って殺された人とか、清に屈服するのに反対して殺された人がいて、そういう人はみんな偉い人として讃えられます。江華島が清に攻め入られたときに、降伏を潔く思わず自決してしまう人もいますが、そういう人も讃えられて、教育の対象、教化の対象になっています。そういう意識はパターン化した認識として入っていったと思うのです。

鬼丸：東学といわれるものの意識はどうですか。

糟谷：東学は、いろいろな思想・要素が混在しています。儒教的なものですとか、道教ですとか、仏教ですとか、伝統的な民間信仰、シャーマニズムというのですかね、そういうものがいろいろあって創られている。東学というのは西学の反対で

ありまして、西学というのは天主教のことです。それに対抗する朝鮮の教えということで名が付けられているわけです。そういうものから言葉、用語を部分的に取り入れている要素が強くて、実際には、お札を飲んでまじないを唱えたと病気にならないといったことを一番ベースにしていますから、どちらかという民間信仰をベースにしているものと言えます。ただ、教義という部分があって、そういう難しい部分を扱う人と、一般の素朴にそれを信じる人という部分があって、違うとは思いますが。実際には教団組織を使って、民衆の救済活動を行うから広がっていったのだと思います。

高津：前の質問と関係するのですが、やはり朱子学と、東学・東学教との二つの関係で、朱子学というのはある程度体系的にはイデオロギーをもっていたと思うのですが、それらが民衆の中に理解される形で展開していたのかどうかという部分に若干疑問があります。しかもそれがナショナリズムを庶民階級の考えの中にずっと流れていくようなことがなぜ起こったのかということが、ひとつです。それとの関わりの中で日本と比較において、親族関係とか生活習慣を含めた朱子学の影響を持ったのだということが日本との違いとおっしゃったのですが、なぜそういうような形がですね、イデオロギーとしての朱子学がなぜ民衆に定着しえたのかということです。とくに生活規律とか、生活習慣といったところを含めて広まったのはなぜかということです。

もう一つは、東学、近代の民衆蜂起の民族的なもののベースとなった東学教というものの、朱子学的なものとの関係が、混在といっておりましたが、そのところがどう違っているのか、あるいは不可分・混在という形で理解していいのですか。

糟谷：日本では朱子学がきちんと学問として体系的にやるのは、朱子学者という人たちで、専門家だと思のですが、朝鮮ではそうではなくて、一般の両班を中心として生活規範として、儀礼を受け入れるという層が、一番裾野になる階層です。マニュアルが実際にはあるわけです。それに従っ

て日常の礼をしている。また、そのことによって、彼らが地方での指導者として管下の民衆に対してそれを教えるということをしたわけですね。地方官もそういうことをすることになっているので、ある程度は民衆にもそのことが正しいことと受け入れさせる努力はされているわけです。

ただ受け入れる側の問題があって、完全にそれに染まったかという、そうではない面があります。例えば、仏教を、両班は排斥をするけれど、他の層はそれほど義理立てしなくてもいいわけだから、なお信じます。両班の中でも実は仏教を信じるという人もいるわけで、金玉均などは実はどうもそうみたいなのです。また、女性の場合は仏事に行ったり、巫女さんと呼んで、まじないをやったりして、そういう意味では信仰があいまいに結合しています。この辺を史料上しっかりたどることを歴史の文献でやるのは大変なのですが、民俗学の研究ではそういうことをやっていると思うのです。

支配層、特に地方に住んでいる支配層は、上下の秩序を民衆が守ることが自らの支配を正当化することになるわけですから、そのことについては繰り返し教えるという仕組みがあるわけですね。それは行政自身がそうやりますし、そういった約束事をする組織もあります。また、書堂という小規模な学校が出てきて、庶民の上層は行っているものもあり、学ぶものは儒教的なものなので、かなり難しいことまで身に着けるということになるのです。それから儀礼は、何回も繰り返してやられるわけだから、それで入っていくという側面があると思います。

しかし、それでも覆いつくせない部分があると思います。そもそも仏教や民間信仰が先に信仰としてあるわけだから、これをすべて駆逐しきるというわけにはいかなかったのだと思います。そういう状態があって、東学ができてくるのだと思います。完全に一色に染まっているのではなくて、一色に染まっているように描いている人というのが実際のところでしょう。公式の議論では朱子学が正当だということで全部やられますから。

高津：儒教というか、朱子学をベースにナショナリズムを論じようというか、ナショナリズムと関わろうとしているのが、現在の韓国の場合は主導的な位置にある研究ということですか。

糟谷：それはまた違うと思います。ただこの時期というのは、そういう朱子学を正統であるという人が中心に立っています。開化派はそういうところから離れているわけですし、そういう意味では崩れが始まっているわけですが。

高津：東学というのは反乱を正当化する論理なのですか。

糟谷：東学という宗教の思想自身にはないと思うのです。宗教上、人間は平等であるということは、人は誰でも天と一体になれるという形で、言っているのです。人によっては差別がないという、それはもう宗教的信念なのです。現実の世の中で人は平等だからそのように世の中をつくり変えなきゃいけないとは言っていないわけです。しかし、そう受け止める人がいないというわけではありません。やはり教団の組織がつくられて、いろんなことをやっていく際に、さまざまな要素が入ってきて、実際には政治的機能を果たしていくというふうに展開したのだと思います。民衆の、村やあるいは郡というある地域を越えて結合するような組織をもってしまったわけですね。

鬼丸：朝鮮王朝時代に大規模な農民反乱というのは多かったのですか。

糟谷：地域を越えたというか、今の郡を南の方（韓国）では一つ二つ分割したような広さなのですが、その郡の単位、そこには地方官が来て、その範囲を統治するのです。その郡のレベルで、その地方官の統治のあり方が問題だといって抗議をする運動を展開するのですが、大体、郡の境を越えたりはあまりしないのです。そういうことは19世紀の初めから起きていて、高宗の時代になってかなり増えてくるのですが、それを越えるのにはやはり何か媒介物が必要だったのです。後は農民独自の反乱というのは、それ以前にはあまりなくて、農民を組織して、盗賊のような者が起こした。それも農民反乱的要素を持っていると

いわれているのは、16 世紀の半ばに黄海道で林巨正の活動があったことは言われています。

鬼丸：そういった農民反乱で、どんなことが起こったのですか。そういうことは小説などで伝わって、後世の民衆は知っていたのではないですか。

糟谷：伝わっていたかは、わかりません。両班の方が書き留めていました。

高津：中央集権国家と両班という官僚制があるとして、農民そのものは、直接中央集権的な国家に従属しているといった関係なのですか。

糟谷：基本的にはそうになっています。地方官が各郡に行って統治して徴税をしたり、軍に兵士として徴発をしたりということをしています。基本的には国家の支配を受けるということになっていますが、有力な両班というのは、私的に囲い込んだりするのです。そして国家のほうには租税や役を出さないといったことがあって、それは地方官の方から、国家の方からみると問題だと言っています。

高津：日本の場合、近世になったら小家族制度、単婚の小家族制度をベースにして村落ができてきて、そういう意味では、中世からの農奴的なものとか隷属的なもの大家族制から単婚小家族制というものに移行するとよく言われますよね。朝鮮の場合はどうなのですか。

糟谷：朝鮮の場合は村のことがよくわからないのです。日本は村の文書というのが名主や庄屋の家に残っているからわかるわけです。そもそも村の役人というものを特定の家に負わせて、記録を残すような体制になっているから残るわけですが、朝鮮の場合、どうもそういう仕組みではありません。だから、郡の地方官の下に、郷吏という実務を担当する事務職員と警察職員みたいな層がいて、彼らが手分けして郡を治める、文書をつくったり、派遣されたり、村にも連絡係みたいなものがあるのだけれども、どうなっているのかというのはあまりよくわかっていないのです。

早川：ハングルの普及運動が 1930 年代に入ってから起こることなのですからけれども、ハングルができたのは 15 世紀ですが、なおここで起こって

くるのは、漢字を使わないということですか。

糟谷：漢字を使わないというか、漢字はできないわけですね。この教える対象になる人というのは。

早川：この普及運動というのはどういうことなのですか。

糟谷：字を知らない人に教えるという識字運動です。簡単な漢字を入れる文章が多いのですけど。

早川：今の韓国の方というのは、ほとんど漢字を知らないというのがありますよね。

糟谷：それは戦後、そういう方針の言語政策を採るから、そうなるのです。

岡本：ナショナリズムとか愛国主義というのは戦後日本の民主教育の中では、非常に否定的にとらえられて、「君が代」と「日の丸」の問題等があって、否定的な見方というか、その中でわれわれの世代も育ってきたということはあるのですが、今日のお話のような朝鮮の歴史をお聞きして、ナショナリズムであるとか、愛国主義に関して、韓国の方というのはそれほど否定的な見方というのではないという印象を受けました。

糟谷：そうだと思います。

岡本：今現在も進行中なのですよ、朝鮮民族の祖国統一という形でのナショナリズムというのでしょうか。

糟谷：そうだと思います。だから具体的に民族の統一というものに貢献した人を高く評価するという形になるのです。全体のトーンは肯定的であると思うのです。北もそうだと思うのです。私らが学生の時、『朝鮮近代革命運動史』という本を、愛国というのがやたら出てくるねと言いながら、読んでいたものです。

岡本：例えば、今年あったワールドカップの盛り上がりに対して、新たなナショナリズムであるということで、日本では若者が顔に「日の丸」をペインティングしていることに関して、議論をかもし出したわけですが、韓国でもものすごく盛り上がっていて、そういう行き過ぎたナショナリズムという批判は、一般的になされないのでしょうか。

糟谷：少なくとも侵略的なものではないという、

自分たちののは日本のものとは違うという意識はあるでしょうね。それはやっぱり負っている歴史が違うといった意識があるのではないのでしょうか。

藤田：今の話題に似ているのですけれども、特にこの近世から近代というのは朝鮮半島の歴史からすると、先ほどのような特別な対日観ではあるのだけれども、ワールドカップのように強い本質的な民族意識みたいなものが高揚する、日本以上に高揚している、それから選手自身もかなりそういうものが強い。スポーツ選手そのもののなかにも、ああいうエネルギーというのが、日本とは明らかに違うとを感じるのですね。それはなんなのだろうなというのは私の個人的な関心だったのです。外国から朝鮮半島が常に侵略と支配に辛酸を舐めてきたという歴史を持っていて、そういう歴史がむしろナショナリズムというのを機能させてきた、あるいは意識させるというのですか、論理的ではなく感覚的に、朝鮮半島の人にも。そういう歴史的な特徴がナショナリズムにもある特徴を生み出していく、そんなふうに理解していいのかどうかを、ちょっと確認したかったのです。それからその中でおそらくそういうナショナリズムは、外圧とか支配とか、外との関係で意識されるものであったり、日本のように国家統一や国民統合に関して、支配勢力が意図的に使うという形でナショナリズムが意識、形成されたり、いずれにしろ、自分たちが周りの国とかの関係の中で、ナショナリズムというものを、機能させている。そう考えると、今のような理解の仕方ではナショナリズムの特徴というのを理解してよいか。そのこととの関係で言うと、対日感情というものがある。反日感情であったり、単に反日感情というものではなくて、かなり強い対抗意識を感じるのです。反日感情というものに凝り固まっているというよりも、かなり特別の対抗意識、ある意味では健全なというものが持っているような気がするのですね。それは日本と朝鮮半島との歴史の関係の問題でもあるので、ごっちゃにしないほうがよいかもしれないのですけれど、そんなふうに整理して今日のお話を伺いましたが、それでいいのでしょうか。

糟谷：ここ 10 数年の状況というのも韓国との関係で言えば違います。要するに民主化が実現してから、日本より民主主義が機能している面があるわけです。そういうことを前提にして、人間として能動的要素が日本の国民より出てくるということ、全体に積極的な性格が多いということになるのは、やはり政治と社会の現在のあり方によるもので、日本みたいになにをやってもといった感じではないのでしょうか。それはもう少し見てみなければわからない仮説ですけど。かなり近いところにも原因はあるから、なかなか歴史ばかりに原因を求めるわけにはいかないと思います。対抗意識があるのは、経済的実態というのがあるのですよね。いろいろ日本と対抗してつくって、部分的には日本より優れているところが出ているということがあるわけなので、実態の裏づけがあつてのことと思うのです。関係が深くて、いろいろあつても、日本からいろいろなものを学んできた存在であったことは確かなことです。近代における関係というのは。植民地の時期だって、そうだったわけですからね。東京に行って、社会主義思想を学んで帰ってくるのですから。

岡本：韓国の国内でも、もしくは北朝鮮の歴史研究、自分たちの歴史研究というのも盛んに行われていると思われるのですが、それは日本の研究者から見て、やはり温度が違うといったようなことは感じられませんか。

糟谷：それは韓国の歴史研究が一言で言ってナショナリズムの色彩が強いと言われることがあります。民族という概念のとり方が、日本は近代においてつくられたものであってというところ方になるのだけれども、韓国ではエスニックグループというものも含めて民族といっているようです。そこで韓国との間で誤解があるみたいです。もっと古くから韓国民族という言い方をします。それから、中国との関係で冊封関係にあって臣下の礼をとっていたということなどは、あまり書きたくないという意識はあるように思いますね。

鬼丸：併合された以後のナショナリズムを見ると、併合前の朝鮮が近代国家を成立させるときに、

あるべきナショナリズムというのは違うものだろうと思うのです。近代国家をつくり上げようとするときのナショナリズムの形成に、支配層のもっている両班意識とか民衆のエネルギーを形成していくという国家全体でナショナルなものをつくりあげようという志向は、反対派と民衆の部分を削っていった、最後は自分たちのものをつくり上げようとしたということなのですか。

糟谷：皇帝とその側近がやったやり方はある意味では自滅する要素もあって、伊藤博文にそういわれています。保護条約を結びに行ったときに、皇帝が「これは大臣とも相談しなくてははいけないし、人民の意見も聞かなくてははいけない」と言いましたが、伊藤は「あなたの国は人民がいうことを聞くような国ではないだろう」と応じています。それは独立協会を抑えたことを指して言っているのだと思います。国民が政治に参加する可能性は甲午改革以降はあったのだと思います。両班とか法制的に差別はなくなっていたわけだから、仕組みをつくりさえすれば、そういった新しい国家体制は皇帝を担いでもできたのではないかと、実際にはうまく力が結集しきれなかったのであると思うのですけど。

高津：近代のナショナリズムで、開化派というのはアイデンティティというのはどういうものを求めたのか、日本では「和魂洋才」というのがありますが。

糟谷：大体同じ意識です。「東道西器」と言います。器は西のものだけでも、道は東のものであるという意味です。また教えは東という「東教西器」という言い方もあります。国王が壬午軍乱の後に、開国開化が国是だという詔を出すのですが、その中にはそういう思想が典型的に展開されます。

高津：もう一つ、日本との比較の問題です。両班は科挙の試験を通っていくとありますが、日本の武士階級とどう違ったのですか。彼らが近代を通して政治的にはリーダーシップというかヘゲモニーを採っていきますよね。

糟谷：要するに「武」ではなくて、「文」の方を主流とします。両班には武官と文官があるのです

が、文官の方が偉いのですよね。もちろん、武官でもちゃんと儒学の勉強をしていないと偉くならない。国王の前で武官も講義したりしないといけないのです。武士とどう違うのかというのは難しいですね。日本の武士もちゃんと教養の勉強をしていて、実際にそれを利用して行政実務ができているのですが、そういう意味では似ている存在もいるし、似ていない存在もあるということぐらいでしか言えません。ただ日本の武士は「武」の方を重視するけれども、両班の方は全体としては「文」の方を優先する、学問の方に価値をおくということになりますかね。

岡本：両班は世襲制ですか。

糟谷：事実上、世襲制になってしまうのです。名門の家は必ず跡継ぎが何代と空けないうちに合格できるように科挙が運用させる。中国ではそうはならないのですけどね。これは仕組みがあって、定期試験が3年にいっぺんあって、そうするといつやるかということがわかっているから、今の試験と同じですが、三年前から計画して勉強できるわけですね。17、18世紀になると定期試験で合格する者より、臨時試験で合格する者が増えます。臨時試験は実施の発表から実施までの期間が短く、早く試験実施の情報を得ることのできる首都漢城やその近辺の居住者に有利でした。名門の家の多くは、漢城やその近辺にありました。臨時試験が多くなることによって、名門の子弟が科挙に合格して、高官に就くルートが広がるという仕組みが、事実上できあがるのです。